

足利工業大学 学生員 鈴木 盛明

足利工業大学 正会員 福島 二朗

1. はしがき

栃木市に現存する多くの商家・土蔵群は、当時の商都としての繁栄を今に伝えとともに、歴史的風情を醸し出している。このような商都を象徴する蔵の町並みは、栃木市が近世以降の巴波川舟運ならびに日光例幣使街道という水陸運輸網により、商業の振興とともに形成されてきたものである。そこで本稿では、近世以降の商業の展開、蔵（見世蔵・土蔵等）の築造年代、商店の取扱商品、その販路等の調査を行い、商都栃木の発展過程を、蔵の町並みが形成された背景・状況をとおして考察したものである。なお、調査の範囲は、旧栃木町の商業の中心地であった上町～下町の大通り（現在の万町～倭町）地区とした。

2. 近世における栃木の水陸交通網と商業の展開

近世における栃木は、1647（正保4）年の奉幣使の派遣に際し日光例幣使街道の宿次伝馬駅となり、また、巴波川は東照宮造営に必要な資材・物資を陸揚げする際に使われ、その後、当該地域の舟運路として商人荷物の輸送を担うことになる。このようにして、栃木は水陸交通の利便と物資集散市場の二つの性格を兼ねそなえた商業の町として発展することになる。

栃木における商人の発端は、栃木城主・皆川氏に仕えていた武士の転身や、近江など各地の商人達が行商の途において徐々に定住するようになったのがその始まりである。その後、商人層は農家に対して支配的地位を確立していくことになるが、それは主に麻の肥料である干鰯や粕等を農家に貸し付け、その代償として生産物の所有権を得ることにより、商人による農家・生産物の掌握が行われたのである。このような商人層の興隆を支えた肥料等の移入や特産品等の移出は、栃木河岸を中継として巴波川舟運により行われていた。当時の主たる運送荷物は、江戸方面からの上り荷は塩・糖・干鰯等の肥料や生活必需品であり、また栃木からの下り荷は商人により集積された麻・綿・たばこ・藍等の特産品や米等であった。近世においては、広範な後背地を背景として産出された各種生産物が加工されないまま輸送され、また近代に至っては、技術移入等により栃木において商品化され市場へと送り出された。その過程において介在したのが商人・問屋であり、需要の増大・商品流通の進展により栃木は商都としての発展をみたのである。

3. 蔵の町並み形成

3-1. 蔵築造の背景

防火を目的とした蔵造りの建物は、江戸時代に町屋の密集に伴い相次ぐ大火が問題となり、その防火対策として、享保年間に一般庶民に対しても初めて土蔵造りが奨励されるようになった。

栃木でも1846（弘化3）年以降、わずか18年の間に4度の大火に見舞われ、その後、防火に優れた蔵造りが行われ、急速にその数が増えていくことになる。

3-2. 蔵の種類

蔵の種類には、見世蔵（店蔵）・塗屋・洋館・土蔵・石蔵・煉瓦蔵があり、そのうち見世蔵は、軒まわりや壁を漆喰で厚く塗ってあり、2階建てで1階の前面を店舗として開放している。同じ造りでも、その軒まわりを漆喰で塗っていないのが塗屋である。洋館はコンクリート造りなどで外観を洋風に仕上げてある。さらに壁を土塗・漆喰仕上げで出入口と窓に防火扉が設けてあるのが土蔵であり、その壁が石積み、煉瓦積みのものが各々石蔵および煉瓦蔵と呼ばれている。

3-3. 件数および築造年代

キーワード：地域史 町並み形成 近世～近代

〒326-8558 栃木県足利市大前町 268-1 Tel.0284-62-0605 Fax.0284-64-1061

蔵造りの建物は、栃木市中心部で約 400 棟あり、そのうち大通りには 129 棟現存している（表－1 参照）。大通りにおける 129 棟の蔵のうち、『見世蔵』と『土蔵』について築造年代により区分すると、江戸時代と明治時代が各々 43 棟ずつあり、両時代で 80%を占めている（表－2 参照）。このことから蔵の町並みは、江戸～明治時代を中心として形成されたことがわかる。

3－4. 商品の販路

江戸～明治時代における各商家の扱った商品およびその販路を知るため、現存する見世蔵および土蔵を有する商店を訪ね調査した。その結果は表－3 に示すとおりである。下駄・荒物等の販路は、大消費地江戸（東京）を中心として関東一円に広がり、さらに東北地方へも及んでいる。また、麻・綿等は江戸（東京）からさらに大阪・京都へと送出されている。逆に栃木へ移入された商品として、愛知・岐阜からの陶器類・刀剣・刃物等があった。これらの商品は、江戸～明治時代において、その多くは巴波川舟運が担い、その後、1888（明治 21）年の両毛鉄道開設以降は鉄道が担うことになる。

3－5. 蔵の町並みの形成

このような商品流通の進展に伴い、見世蔵ならびに大量の商品を保存・保管するための土蔵が築造されていくことになり、明治期後半においては、その商品を取り扱う商店数および業種も増えている。表－4 は、明治 40 年の大通りにおける業種別商店数をまとめたものであるが、大通りの 700mの間に 100 軒以上の商店が軒を連ね、蔵造り建造物による町並みが形成されることになる。

表－1 現存している蔵造りの建物

見世蔵	26 棟	石蔵	6 棟
塗屋	8 棟	煉瓦蔵	3 棟
洋館	2 棟	土蔵	81 棟

表－1、2「栃木市の町並み・蔵造りに関する調査報告書（昭和 62 年）」参照

表－2 見世蔵・土蔵の時代区分

建造年代	種類・件数
江戸時代	見世蔵 10 棟 土蔵 33 棟
明治時代	見世蔵 6 棟 土蔵 37 棟
大正時代	土蔵 2 棟
昭和以降、および不明	見世蔵 8 棟 土蔵 11 棟

表－3 商品の販路 *は移入

商品	販路
下駄、荒物、小間物、紙	関東一円（東京、茨城、千葉）東北地方（宮城、福島）
麻、綿、反物類、呉服	関東一円（東京）、近畿地方（大阪、京都）
菓子、酒	近隣の地域
*陶器類、刀剣・刃物	中部地方（愛知、岐阜）から移入

[括弧内は主要な地域]

表－4 明治 40 年の大通りに面した商業関連業種 （単位：軒）

履物	17	書籍	8	菓子	5	印舗	4	酒	3	煙草	2	米穀	2
麻	12	古着	7	金融	5	荒物	4	玩具	3	籠	2	旅館	2
綿	11	乾物	7	陶器類	5	文具	3	質	3	提灯	2	硝子類	1
小間物	11	薬	6	紙	4	飲食店	3	鉄物	2	醤油・味噌	2	茶	1
呉服	11	雑貨	5	洋服	4	染物	3	建具	2	鞆	2	時計	1

「栃木縣営業便覧（明治 40 年）」参照

4. むすび

本研究では、近世～近代を通じて北関東有数の商都としての発展をみた栃木市を取り上げ、その発展の過程を商都の象徴である蔵の町並みが形成された背景・状況と商業の展開・振興をとおして述べた。今後は、商都としての発展の要因を運輸体系との拘りをとおしてより明確にしたいと考えている。尚、蔵の築造年代等、蔵に関する内容は『栃木市の町並み・蔵造りに関する調査報告所（昭和 62 年 3 月）』（栃木市産業部商工課）を参照するとともに、国立小山工業高等専門学校 河東 義之 教授よりご教示を賜りました。ここに記して深甚なる謝意を表する次第です。また、資料のご提供を頂いた栃木市関係者各位に対し厚くお礼申し上げます。